

エンパワメント・アプローチにおける アセスメント過程

——精神科ソーシャルワーカーが行う
精神保健福祉実践活動に着目して——

栄 セツコ

キーワード：精神科ソーシャルワーカー，アセスメント過程，エン
パワメント・アプローチ，ストレングス

I. 本稿の目的

精神障害者のパワーレス（powerless）に関連する要因には，精神疾患から生じる心身機能の低下，日常生活における活動の制限，社会資源の不足に起因する選択の機会のなさ，医学モデルにおける専門職主導型の治療関係，偏見などの抑圧的な環境，活動の制限や制度の未整備による経済力の低下（貧困，失業）などがあげられる。これらの要因が相互に作用しあうなかで，精神障害者の自信喪失感，孤立無援感，学習無力感が強くなり，パワーレスな状態になることが指摘されている¹⁾。このような精神障害者に対して，近

1) 栄セツコ（2003）「エンパワメント・アプローチに基づく精神保健福祉実践活動ー精神科ソーシャルワーカーの活動の現状とその活動に関連する要因」『精神保健福祉』34（4），341-350.

年，エンパワメントを目指したアプローチが注目されている。

エンパワメント・アプローチは、パワーレスな状況にある人々が潜在的な適応力を強化することや、抑圧的な環境や構造を変革することを目的として、個人的、対人関係的、社会的、政治的レベルといったマイクロレベルからマクロレベルで、そのパワーを発揮させていくアプローチである²⁾。このアプローチに関して、マイリー (Miley, K. K.) が「エンパワメントに基づくソーシャルワーク実践の基盤は、ストレングスへの焦点化にある」と明示している³⁾。また、ストレングスに着目した実践に関して、コウガー (Cowger, C. D.) は、その中核に「アセスメント」を位置づけ、アセスメント過程を通して、クライアント自身がエンパワメントしていくことを示唆している⁴⁾。このようなことから、エンパワメント・アプローチでは、クライアントの弱さや病理ではなくクライアントの強さやストレングスに着目したアセスメント、及びそのアセスメント過程に特徴があるといえる。

従来の精神医療保健領域における医学モデルのアセスメント（診断）は、主として専門職の理論知と経験知に基づいて行われることが多く、精神疾患を患った「人」は「ケース」として扱われ (Saleebey, D.)⁵⁾、「精神障害者」という属性のなかに位置づけられてきた。その着眼点は病理や欠陥に集束されるため、アセスメントに基づく計画は、治療や訓練によって、個人の病理や欠陥を軽減させ、個人の変容を促すものだった (Rapp, C. A.)⁶⁾。このようなアセスメント（診断）過程に、精神疾患を患った当事者本人が参加する

2) Lee, J.A.B. (2001) *The Empowerment Approach to Social Work Practice* 2nd ed., Columbia University, New York, 30-55.

3) Miley, K.K., O'Melia & DuBois, B., (1998) *Generalist Social Work Practice, An Empowering Approach*, Allyn & Bacon, Boston, 84-86.

4) Cowger, C.D. (1994) Assessing Client Strengths: Clinical Assessment for Client Empowerment. *Social Work*, 39 (3), 262-268.

5) Saleebey, D. (2000) *The Strengths Perspective in Social Work Practice* 3rd ed., Allyn and Bacon, Boston, 84-87.

6) Rapp, C.A. (1998) *The Strengths Model*, Oxford University, New York, 1-23.

ことはほとんどないため、精神疾患を患った人は自己統制感を欠き、無力感や孤独感を抱くようになり、パワーレスな状態になることが少なくなかったといえる。そこで、精神科ソーシャルワーカー（Psychiatric Social Worker：以下、PSW）は、エンパワメント・アプローチにおいて、精神障害者本人が、自分の状況を客観的に認識し、自分の援助計画の作成に主体的に参加できるようなアセスメント過程を実践することが望まれる。

エンパワメント・アプローチにおいて重要な位置を占めるアセスメント過程は、従来から、援助ゴールの選択、援助計画の立案やその実施、援助の効果測定という一連のソーシャルワーク過程の局面に影響するため、ソーシャルワークの中核的な概念として位置づけられてきた^{7) 8)}。

アセスメントに関する先行研究をみると、米国では問題把握の技法や情報収集の方法に関する研究が行われているが、アセスメント過程における実践活動については十分な論議がなされていない⁹⁾。また、わが国のアセスメント研究でも、ソーシャルワーク過程におけるアセスメントの重要性から、実践場面で活用できるアセスメント・ツールの開発に関する研究は多くみられるが¹⁰⁾、ソーシャルワーク実践の展開過程におけるアセスメント過程の具体的な支援内容は明確にされず¹¹⁾、アセスメントが情報認識方法や定式化された簡便な検査方法として捉えられる傾向にあるのが現状である¹²⁾。

7) Hartman, A (1994) Social Work Practice, Reamer, F.G. ed., *The Foundations of Social Work Knowledge*, Columbia University, New York, 27-32.

8) Milner, J. & O'Byrne, P. (1998) *Assessment in Social Work*, Macmillan, U.K. (=J. ミルナー P. オバーン著 杉本敏夫 津田耕一監訳 (2001)『ソーシャルワーク・アセスメント 利用者の理解と問題の把握』、ミネルヴァ書房, 1-7.)

9) 中村佐織 (1994)「ソーシャルワーク援助におけるアセスメントと記録方法の模索」『ソーシャルワーク研究』20 (1), 11-16.

10) 中村佐織 (1998)「ソーシャルワーク実践過程におけるアセスメント機能」『社会問題研究』47 (2), 149-163.

11) 中村佐織 (2002)「実践課程研究におけるアセスメントの位置」『ソーシャルワーク・アセスメント』相川書房, 23-56.

12) 中村佐織 (1990)「精神障害者の就労援助における PSW のアセスメント状況と課題」『日本女子大学社会福祉学科社会福祉』31, 65-71.

そこで、本稿では、エンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程に着目し、その過程における精神科ソーシャルワーカーが行う精神保健福祉実践活動を提示することを目的としている。

その方法として、まず、先行研究からアセスメント過程を概観し、その過程における構成要素を検討する。次に、エンパワメント・アプローチの特徴であるストレングスについてレビューし、アセスメント過程における活動上の留意点を確認する。そして、PSW の行うエンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程を定義し、その過程の構成要素に沿って、具体的な精神保健福祉実践活動を提示することにした。

2. エンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程

1) アセスメント過程の構成要素

ソーシャルワーク過程におけるアセスメントの歴史は、1917年に刊行されたリッチモンド (Richmond, M. E.) の『社会診断 (Social diagnosis)』に遡る。リッチモンドは「診断はある特定のクライアントの社会状況とパーソナリティのできるかぎりの正確な理解 (definition) に到達する試みである」と定義し、社会診断における心理社会的な観点の重要性を指摘している。そして、社会診断の過程が、調査、資料収集、資料選別、資料解釈で成り立っていることを明示している¹³⁾。1970年代に入り、バートレット (Bartlett, H. M.) がその著書『社会福祉実践の共通基盤 (The Common Base of Social Work Practice)』(1970) のなかで、伝統的ケースワークにおける「社会診断」に代わる用語として、ソーシャルワーク活動を認知する過程として「アセスメント (assessment)」という用語を採用した¹⁴⁾。そして、アセスメン

13) V.P. ロビンソン著 杉本照子訳 (1969) 「社会的診断」『ケースワーク心理学の変遷』岩崎学術出版社, 39-53.

14) Bartlett, H.M. (1970) *The Common Base of Social Work Practice*, NASW, New York.

ト過程において、状況分析、決定的諸要因の確認、他にとるべき可能な活動、採用すべき活動の決定を意識的に行うことを指摘している。その後、1987年に、全米ソーシャルワーカー協会がアセスメントをソーシャルワークの本質部分に位置づけ、「アセスメントは二つのプロセスから構成されており、その一つはクライアントのエンパワメント・システムとその環境に関するデータを収集すること、もう一つは援助計画を展開するための基礎になるデータを評価することである」と定義している¹⁵⁾。そして、アセスメントを著書にまとめたメイヤー（Meyer, C.）は、生態学的視座から、医学モデルの用語である「study」「diagnosis」「treatment」の代替として、「exploration」「assessment」「intervention」という用語を用いた。そして、アセスメントとは「問題の意味をみつけることであり、どのように複雑なケースを理解するかという認知的プロセスである」と定義し、アセスメントにおける人と状況との関係性を明確にする重要性を指摘している¹⁶⁾。

わが国では、1978年に、小松源助が先述のパートレットの著書である『社会福祉実践の共通基盤』を翻訳して以降、アセスメントはソーシャルワークの重要な要素として位置づけられるようになり、その後も続いて、小松、太田、中村などによって整理されてきた。小松は、アセスメントを「クライアントが直面している問題と状況を確認し、理解するために、資料を収集し、分析するとともに、問題解決のための計画を確定していく過程である」と定義している¹⁷⁾。また、太田は多くの先行研究をもとに「アセスメントとは、必要な情報の収集と処理を通じ、クライアントとその生活をめぐる問題と状況の構成や要因の理解と、援助計画と実践の展開に必要な情報の系統的提供

15) Northen, H. (1987) Assessment. Minahan, A. ed., *Encyclopedia of Social Work*, 18th, NASW, Silver Spring, 171-183.

16) Meyer, C. (1995) Assessment. Edwards, L.R. ed., *Encyclopedia of Social Work*, 19th, NASW, Washington, D.C., 260-270.

17) 小松源助（1982）「アセスメント」中村優一編『現代社会福祉事典』全国社会福祉協議会，59.

を目的にした援助活動の認識過程である」としている¹⁸⁾。中村は、「アセスメントとは、クライアント・システムの問題に対して、ソーシャルワーカーとクライアントや関係者たちが可能な限り必要かつ適切な情報収集を行い、その情報に基づき生活問題状況の理解と援助計画や実践展開に必要な資源や方法の提供を目指して専門的判断を行なう認識過程である」と定義し、エコシステムの視座から情報収集と問題認識を行うことが第一義的な目的であると指摘している¹⁹⁾。

このような先行研究から、アセスメント過程は、クライアントの理解を図る活動と、次の局面である援助計画の立案を認識する活動、そして、それらに必要な情報収集に関する活動で構成されているといえる。

2) アセスメント過程における活動上の留意点

ここでは、エンパワメント・アプローチで重視されているストレングスに着目し、ソーシャルワーク実践におけるストレングス視点を提唱したサリビーと、ストレングスに着目したアセスメントのガイドラインを説いたコウガーの見識を紹介し、アセスメント過程における活動上の留意点を明確にする。

①サリビーによるストレングスに着目した実践の原則

サリビーは、ソーシャルワーカーなどの援助専門職は人の状態を理解するのに、個人・家族・地域社会の病理、欠陥、問題、異常、犠牲、障害に着目する方法が染み込んでいると指摘し、エンパワメント実践の基盤は人間の潜在能力を認めることにありと強調している。そして、ストレングスに着目したソーシャルワーク実践の原則として、以下の5点をあげている²⁰⁾。

18) 太田義弘 (1994) 「ソーシャルワークにおけるアセスメント」『ソーシャルワーク研究』20 (4), 7.

19) 中村佐織 (1999) 「アセスメント」, 太田義弘他編, 『ジェネラル・ソーシャルワーク』, 光生館, 91-100.

20) Saleebey, D. (2000) *The Strengths Perspective in Social Work Practice* 3rd ed., Allyn and Bacon, Boston, 84-87.

表1 ストレngthsに着目した実践の原則

第1は、個人、グループ、家族、地域にはストレngthsがあるという信念をもつ。
第2は、トラウマや虐待および病気は苦しみであるかもしれないが、それらは挑戦や好運の源になる可能性を秘めている。
第3は、個人、グループ、コミュニティの成長や変化の可能性の限界はないものと仮定して、それらの希望を受け入れる。
第4は、援助者はクライアントと協働することにより、最高のサービスを提供することができる。
第5は、あらゆる環境は資源に充ちている。

②コウガーによるアセスメントのガイドライン

コウガーは、「クライアントのストレngthsは、エンパワメントの燃料であり、エネルギー源である」と指摘し²¹⁾、ストレngthsに着目したアセスメントの重要性を強調している。それは、アセスメントにおいて、クライアント自身が困難な状況をいかに定義づけるか、またそれらの状況に関連するダイナミックな要因をいかに意味づけするかが重要であると指摘している。そして、アセスメントにおいて、ワーカーとクライアントが障害に着目するならば、その障害を軽減することに力を注ぐことになるが、ストレngthsに着目するならば、クライアントが自己選択や自己決定できるように支援することになるため、クライアントは自己信頼感を高めることができ、そのことによって将来に対する希望を抱くことができるようになることから²²⁾、クライアントのエンパワメントに寄与することができるといえる。

そして、コウガーは、ストレngthsに着目したアセスメントのガイドラインを12項目にわたって提示している（表2）。

21) Cowger, C.D., Op.cit., 263.

22) Cowger, C.D., Ibid, 262-268.

表2 アセスメントのガイドライン

1. クライアントによる事実の理解を優先する。
2. クライアントを信じる。
3. クライアントが望んでいることを見つける。
4. クライアントとその環境のストレングスをアセスメントする。
5. 多次元のストレングスをアセスメントする。
6. 個別性を見つけるために、アセスメントを使う。
7. クライアントが使う言葉を用いる。
8. クライアントとワーカーの協働でアセスメントを行う。
9. アセスメントでは、相互同意まで到達するようにする。
10. 非難することはさける。
11. 因果関係的（原因と結果）な考え方はさける。
12. 診断ではなく、アセスメントを行う。

サリビーの実践の原則やコウガーのアセスメントのガイドラインをふまえ、アセスメント過程における活動上の留意点として、クライアントとその環境のストレングスに対する絶対的信頼およびその活用と増強、人と状況の全体性とその関連性（クライアントとその環境との相互作用）の考え方、クライアント主導の過程、ソーシャルワーカーとクライアントの協働作業などをあげることができる。

以上のことから、PSW が行うエンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程では、精神障害者との信頼関係を形成しながら、人と状況の全体性の観点から精神障害者とその環境のストレングスに着目した理解を深め、精神障害者が援助計画の立案に参画することができるように、必要な情報収集をクライアントと協働して行うことが望まれる。そこで、本稿では、PSW が行うエンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程を「精神科ソーシャルワーカー（PSW）が、精神障害者のかかえる生活課題を人と状況の全体性の観点から情報収集し、その状況におけるクライアントに共感しながら、クライアントに対する正確な理解を深め信頼関係を形成する。

そして、人と状況の関連性の観点から、クライアントが自らの生活課題を意味づけし、クライアントとその環境のストレングスを活用した問題解決に対する意欲を高め、クライアントの自己決定に基づく援助計画の立案が可能になるように支援する過程」と操作的に定義することにした。

3. PSW が行うエンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程の精神保健福祉実践活動

PSW が行うエンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程の定義をもとに、その過程の精神保健福祉実践活動を、クライアントの理解を図る活動、援助計画の立案を認識する活動、およびそれらに必要な情報収集に関する活動、から検討することにした。

1) クライアントの理解を図る活動

クライアントは最大の情報源であり、クライアントが真実を語ることからクライアントの正確な理解が始まる。そのため、SW は対面的状況において、クライアントが安心して自分のことを語ることができるように、クライアントとの間に信頼関係を形成することが必要になる。そこで、SW はクライアントのおかれている状況に共感し、その状況におけるクライアントの混沌とする気持ちに対して理解を深めるように努めることや、クライアントの表情や声のトーン、しぐさなどのノンバーバルな表現からも、クライアントの理解を深めるように努めることが求められる。そのようなSW の態度により、クライアントがSW に理解してもらえたという気持ちが生じ、今まで話さなかった心のうちを語ることができるようになる。その結果、SW はクライアントから多くの情報を得ることができるようになり、より一層クライアントを正確に理解できるようになるといえる。このようなSW とクライアントとの相互作用により、両者に信頼関係が形成され、その関係が深まるなかで、クライアントから必要な情報が提供されるようになり、そのことで、

SW がよりクライアントの正確な理解が図れるという良好な循環が形成され
ると考えられる。この過程の中で、クライアントは自分自身が重要な存在で
あると認識できるようになり、主体的に生活課題の解決に取り組む意欲が高
まるようになっていく。このように、SW がクライアントとの間に信頼関係
を形成することは、収集できる情報の広さや深さなどに関与していることか
ら重要な活動といえる。特に共感的態度はSW がクライアントの現状に
対する感情や生活課題の意味をクライアントの立場から理解することを示し
ており、SW が共感的態度で耳を傾けるならば、クライアントは自分の思い
や考えを整理し組み立て直すことができるようになることから重要な活動と
いえる。

精神障害者の中には、人間関係のなかで悩み、挫折感を経験してきた人や、
自分の意に反して、障害や疾病に関する事項をはじめ、生活史や家族関係な
どを話さざるをえない経験をした人、また、本人自身の中に「精神障害者」
に対する偏見がある人も少なくないため、本音で「自己を語る」ことに躊躇
してしまう場合があることが推察できる。そこで、PSW が精神障害者のお
かれている状況に共感的な態度や受容的な態度で関わりながら信頼関係を形
成することによって、安心して自らを語る可以提供し、自らの
生活課題の解決にむけて取り組めるように支援することが求められる。

このようなことから、クライアントの理解を図るためには、信頼関係を形
成する活動が必須であり、「クライアントへの共感的態度」「クライアントへ
の受容的態度」「クライアントの希望の重視」などの6項目を作成した。

2) 援助計画の立案を認識する活動

エンパワメント・アプローチでは、プロセスにおけるクライアントの参画
を重視しているため、アセスメント過程における援助計画の立案の際にも、
クライアント自身の希望や自己決定を最大限に尊重することを強調している。

しかし、精神障害者の場合、長期入院などから受動的な態度を余儀なく強

いられてきたことや、専門職や家族のパターンリズムから自己決定する機会を奪われてきた人が少なくない。また、自己決定するだけの選択肢がない場合や、選択肢があっても選択後のイメージができずに決定そのものを躊躇している場合もみうけられる。

荒田は、精神障害者の自己決定に関して、PSW と精神障害者の相互関係が影響することを強調している²³⁾。つまり、精神障害者の「自分で決めたい」というニーズを尊重する PSW の姿勢が精神障害者に影響を与え、精神障害者が自己決定に対して自信をもつことが可能になるというのである。また、柏木は、精神障害者が自己決定できるかどうかという特質は「クライアントの能力」と「関係の質」と「かけた時間」の3要素に関係するとし、自己決定において、時間的要素とともに、PSW と精神障害者との援助関係の質の重要性を指摘している²⁴⁾。この援助関係をバイステック (Biestek, F. P.) はケースワークの魂 (soul) と表しており、ケースワークにおける面接や調査、さらに治療といった過程に生命を与えるものであり、かつ、クライアントが人間としての尊厳と価値をもつ存在として自己認識できるものであると明示している²⁵⁾。つまり、援助関係を形成することにより、クライアント自身が主体的に生活課題の解決に取り組める基盤を構築することができるといえる。このようなことから、精神障害者の自己決定に基づく援助計画の立案は、クライアントの権利擁護の視点と有効な援助効果の視点からも重要な留意点であるといえる²⁶⁾。

以上をふまえて、精神障害者の自己決定の支援を考えると、PSW は精神障害者との間に援助関係を形成することを基盤として、精神障害者の自己決

23) 荒田 寛 (2002) 「PSW の役割と課題」『社会福祉研究』第84号, 50-57.

24) 柏木 昭 (1992) 「障害者の人権と自己決定—精神障害者の社会参加—」『精神医学ソーシャル・ワーク』第29号, 92-102.

25) F.P. バイステック著 尾崎 新・福田俊子・原田和幸訳 (1996) 『ケースワークの原則 援助関係を形成する技法』誠信書房, 212-217.

26) 栄セツコ (2003) 「自己決定と自己覚知」日本精神保健福祉士協会精神障害者福祉研究委員会編『精神保健福祉士の価値について』, 107-113.

定能力を信じ、自己決定能力を引き出す環境の整備や、適切な選択肢や情報の提示、決断をした内容の検討などの支援をすることが求められる。具体的には、決定に躊躇している背景を明らかにしながら、複数の選択肢がある場合は、それぞれの選択肢を選ぶことでどのような結果がもたらされるのかをイメージできるように説明することや、本人の下した決断が明らかに本人の不利益になると判断された時は、本人の意志を尊重しながら気になる点を説明し、再度決定した内容を一緒に検討する姿勢が求められる。また、日頃の本人では決してしないような悲観的な決断を下した時は、本人の気持ちを受け止め、今すぐ決定する必要がなければ、その決定を延ばすという提案を試みる姿勢が求められる。

このことから、援助計画の立案を認識する活動において、クライアントの自己決定を重視し、それを支援する活動として、「クライアントの決定能力への信念」「選択肢に対する予測の提示」などの10項目を作成した。

3) 情報収集に関する活動

アセスメント過程における情報収集とは、クライアントの理解やクライアントがおかれている状況、クライアントの生活課題、および生活課題を解決する資源などについて情報を得る活動を意味する。大滝は、情報収集には、情報収集の方法、情報収集の内容とその整理方法、援助計画の立案における資料づくりなどの多面的な留意点があると指摘しており²⁷⁾、ここではそれぞれについて検討していくことにする。

①情報収集の方法

SWが行う情報収集の方法には、面接や訪問、グループにおける参与観察などがあげられる。クライアントの居宅を訪問することは、クライアント自身が安心した場所で話せるだけでなく、クライアントの住居水準や、生活状

27) 大滝敦子(1999)「アセスメントに役立つ知識基盤とは何か」『明治学院論叢』639, 25-43

況・家族状況、および地域状況などに関する理解を深めることができるという利点がある。また、グループにおける参与観察は、クライアントの生活や活動を「みる」だけでなく、日常生活の様子やその変化を垣間みることができることや、観察者自身の体験も情報の素材とすることができるという特徴がある²⁸⁾。このように、訪問や参与観察などの生活場面面接はクライアントの状況を全体的に把握することができることから、情報収集における重要な活動といえる。

また、情報の入手経路には、クライアントやその家族のほか、クライアントに参与している関係機関や地域の関係者、友人、近隣などがあげられ、それぞれのもつ情報を統合することで、クライアントを全体的に把握することが可能になるといえる。ただし、クライアントに関する情報を他者から入手する場合は、クライアント本人や家族にその目的を説明し同意をえるように留意しなければならない。

②情報収集の内容と整理方法

クライアントの全体的状況に関する情報収集は、時系列的な観点と人と状況の全体性という横断的な観点から行うことが求められる。前者はクライアントを病歴や入院歴だけではなく、一人の生活者としての生活史や家族史といった生活の継続性の観点から把握することを示している。また、後者では、クライアントを家族や仲間などのインフォーマルな関係や関係機関を含めたフォーマルな関係などのクライアントを取り巻く環境およびそれらの関連性も視野にいれた観点から理解することを示している。

このことをふまえ、PSW は、クライアントに関する内容として、次の2つの観点から情報収集することが求められる。

一点目は、精神障害者を「障害者」や「病者」であるまえに、一人の「生活者」と捉える観点をもつことである。この観点は、1993年の「障害者対策

28) 永野武 (1999) 「質的調査の方法」 大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋・永野武編『社会調査へのアプローチ 調査と方法』ミネルヴァ書房, 189-244.

に関する新長期計画」のなかで、「障害者は、障害のない人と違った特別の存在ではなく、障害のない人と同じ社会の構成員である」と示した人間観と符合するものである。また、荒田は「生活者とは、自分自身の生活全体を自分で把握している主体者であり、自らのライフ・スタイルを独自に獲得し保持するために、さまざまな社会経験や日常の営みをダイナミックに実践することを意味している」と指摘している²⁹⁾。この観点では、生活の主体者はクライアント自身であること、疾病や障害による生活課題だけではなく、生活者としてのライフコースを考慮した生活課題にも着目し、それぞれの年代に応じた社会的役割についても考慮することの重要性を示しているといえる。また、生活者の観点では、疾病や障害はその人の一部分であり、その他の部分には個性豊かな部分があることも示唆している。この個性豊かな部分とは、コウガーやサリビーがストレングスと示したものと合致するものであり、その人のもつ希望、関心事、長所、対処能力、生活経験や、クライアントを取り巻く環境の人的資源、関係機関、制度といった社会資源があげられる。中でも、アセスメント過程の目的の一つが、生活課題を解決する資源をみつけだすことにあることから、クライアントの対処能力は重要な情報である。その意味では、精神障害者の場合は、疾患を患った経験からえた知恵などもストレングスと捉えることができる。このように、クライアントのストレングスを明確にすることは、個別性を重視したアセスメントを行うことができることから重要な活動といえよう。さらに、PSW は精神障害者本人との日頃の会話のなかで、ストレスを過度に感じる状況や、危機状況における対処の仕方、医療の使い方などを確認しておくことは、精神障害者のセルフケア能力の向上を目指すうえで重要な活動といえる³⁰⁾。

29) 荒田 寛(2002)同掲論文, 51.

30) 岩崎 香(2002)「精神保健福祉領域で使用されているアセスメント項目の分析」ソーシャルケアサービス従事者養成・研修協議会 アセスメントシートの開発と事例研究法の開発部会研究班編『ソーシャルワークにおけるアセスメントの方法とその課題』54-62.

二点目は、精神障害者の生活上の困難さ（生活のしづらさ）に関する観点である。窪田は、精神障害者の生活問題には、①諸問題間の構造的関連、②生活史的累積の構造、③人間関係の問題、④それらの内面化があるとし、これらが重層的に繋がっていることを指摘している³¹⁾。また、山根は多くの先行研究から、精神障害の特性を①疾患と障害の共存、②（障害の）相対的独立性、③（障害の）相互の影響性、④環境との相互作用、⑤障害の可逆性、の5点にあげている³²⁾。このことは、精神障害者の生活上の困難さは、個人の疾病、個人の対処能力、個人を取り巻く環境における精神障害者に対する偏見、社会資源の不備など、それぞれが相互に作用していることを示している。つまり、PSW は、精神障害者の生活上の困難さ（生活のしづらさ）が個人に起因するのではなく、精神障害者の社会経験の少なさや本人を取り巻く環境との相互作用から捉えることが重要であるといえる。

以上のように得られた個々の情報を整理する際に、ジェノグラム（genogram：家族システム関係図）やエコマップ（eco-map：生活環境評価図）、生活史、社会資源一覧表などのチェックリスト、スケール化された用紙などを使用するとクライアントの全体像を視覚的に理解しやすくなる。

④援助計画の立案における資料づくり

援助計画の立案における資料づくりには、クライアントの生活課題の解決に必要な社会資源に関する情報収集が必要となる。具体的には、社会資源に関する、利用の可能性、即応性、適量性、適質性、利便性、継続の可能性、クライアントの利用に対する心理的抵抗などの情報を確認することが求められる。また、SW 自身が社会資源の一つとして機能できるように、日頃の社会生活において、クライアントの利益になるものについて留意することも重要な活動といえる。

31) 窪田暁子（1990）「精神障害者の福祉」『精神医学ソーシャルワーク』第27号，18-21.

32) 山根 寛（1999）「精神障害者の就労支援」『Facilities Net』2（4），27-34.

このことから、情報収集に関する活動では『情報収集のための入手経路の利用』『社会資源に関するさまざまな要素の情報収集』『さまざまな方法による情報収集』に関して25項目を作成した。

以上のことに基づき、PSW の行うエンパワメント・アプローチのアセスメント過程における精神保健福祉実践活動として、『クライアントの理解を図るための信頼関係の形成に関する活動』の6項目、『援助計画の立案におけるクライアントの自己決定の支援に関する活動』の10項目、『クライアントの理解および援助計画の立案に必要な情報収集に関する活動』の25項目、合計41の項目を作成することにした（表3）。

4. 今後の課題

1) エンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程の精神保健福祉実践活動項目に関する有用性と妥当性の検討

本稿では、PSW が行うエンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程の精神保健福祉実践活動に対する41の項目を作成した。その際、本項目では、クライアントとその環境のストレングスに着目し、それらのストレングスに対する絶対的信頼およびその活用と増強、クライアントと状況の全体性とその関連性（クライアントとその環境との相互作用）の考え方、クライアント主導の過程、ソーシャルワーカーとクライアントの協働作業を重視した。加えて、PSW が留意すべき精神障害者の特性を考慮して、信頼関係の形成の最重要視、援助計画の立案における自己決定の支援、情報収集する内容として、クライアントの病理や欠陥だけではなく、疾患の体験やセルフケア能力などのストレングスに着目した項目を組み入れた。これらの実践活動項目を提示することにより、PSW が経験的に行っているアセスメントの思考過程を意識化する一助になることができるとともに、PSW のアセスメント過程における実践活動を評価する一助になることが考えられる。そのためにも、本研究で提示した PSW が行うエンパワメント・アプローチにおけ

表3 PSW のアセスメント過程における精神保健福祉実践活動の項目

クライエントの理解を図るための活動（信頼関係の形成） 6項目	
<ul style="list-style-type: none"> ・関わりの初期は、問題の解決よりも、問題を抱えているクライエント自身へ共感することに重点をおいている。 ・クライエントが感じている気持ちをわかちあうように心がけ、今後の対処の仕方を自分のことのように考えている。 ・クライエント本人の言動や表情以外に、本人が言語化していない気持ちを理解するように努めている。 ・クライエントがあなた自身に対して抱いたネガティブな感情も受け止めるようにしている。 ・クライエントの発した言葉が理解しにくいときは、あなた自身の理解の仕方が間違っていないかを本人と確認している。 ・クライエントの発言に対し、クライエントの心理的な内面に焦点をあてて分析するよりは、現実的な生活を支援していく上で必要と考える解釈の仕方を行っている。 	
情報収集に関する活動 25項目	
入手経路 <ul style="list-style-type: none"> ・地域にある人脈や社会資源を把握するため、民生委員・ボランティアなどから情報を集めている。 ・地域にある人脈や社会資源を把握するため、地域の関係機関から情報を集めている。 ・地域にある人脈や社会資源を把握するため、クライエント本人や家族から情報を集めている。 ・クライエント本人の全体像を把握するため、本人と関わっている人から話をきいている。 方法 <ul style="list-style-type: none"> ・クライエントに質問の意図を説明してから、本人に話をきくようにしている。 ・家庭訪問時には、クライエント本人に詮索しないで、生活状況を把握するようにしている。 ・グループ活動では、メンバーの一員として関わりながら、メンバー一人ひとりの変化やメンバー同士の動きにも注目している。 ・メンバー同士の会話の流れや個々のメンバーの思いや言動などから、その場の全体の雰囲気を感じている。 ・家族とクライエント本人の双方の話から、本人を中心とした全体的な家族像を把握するように努めている。 内容 <ul style="list-style-type: none"> ・日頃の会話の中で、危機状況時において、クライエント本人が希望する対応の仕方を、本人と一緒に話し合っている。 ・日頃の会話の中で、クライエント本人が過度にストレスを感じる状況（危機状況）と一緒に確認している。 ・日頃から、様々な場面において、クライエントの考え方、感じ方、他者との関係のとり方などを把握するように努めている。 ・日頃から、さまざまな場面で、クライエント本人のできることや、できないことを把握するように努めている。 ・日常の関わりの中で、クライエント本人が上手に医療を利用できる方法について、一緒に話し合っている。 ・クライエントとの日常的な関わりの中で、クライエントの服装、身だしなみ、姿勢、体格の変化などにも注意を払っている。 ・クライエントの失敗体験の原因を病気に求めるのではなく、クライエントの経験の少なさや、経験する機会がなかった環境との関係から捉えるようにしている。 ・これまでのクライエントとの関わりについての情報は、あなたの記録から確認できるようにしている。 ・これまでのどのような生活を、今後どのような生活を送りたいのかという時間的な流れの中で、本人を理解するように努めている。 	
援助計画の立案における資料づくり <ul style="list-style-type: none"> ・クライエントが利用したい社会資源が、手ごろな料金であるか否かを確認している。 ・クライエントが利用したい社会資源が、待たずに利用できるか否かを確認している。 ・クライエントが利用したい社会資源が、継続して利用できるか否かを確認している。 ・クライエントが利用したい社会資源が、選択できる幅があるか否かを確認している。 ・クライエントが利用したい社会資源が、クライエントの生活している地域にあるかを確認している。 ・クライエントが利用したい社会資源が、利用することで後ろめたい気持ちになるか否かを確認している。 ・あなた自身の日頃の社会生活において、クライエントの利益になるものが何かに注意を払っている。 	
援助計画の立案を認識する活動 10項目	
<ul style="list-style-type: none"> ・日頃の本人ではないような悲観的な決断を下した場合は、その決定をした本人の気持ちを受けとめ、今すぐ決定する必要があるければ、その決定を延ばすことも提案している。 ・クライエントが複数の選択肢で迷っている場合、ある選択肢を選ぶことで予測できる結果を説明しながら、クライエント本人が自己決定できるように支援している。 ・クライエントが自分の生活能力以上にことに取り組もうとするときは、取り組み後の予測される展開を共に話し合っ、いつでも相談していることを本人と確認している。 ・クライエントの希望する行動が、他人に害及ばす可能性がある場合は、その行動を修正するように促している。 ・クライエントの希望を最優先した関わりが、本人にどれだけリスクが生じるかも予測しながら関わっている。 ・本人が選択した仕事（役割）を、あなたが安易に代行するのではなく、本人にその仕事ができると信じて支援している。 ・クライエント本人がそろそろ自分一人できそうだと感じた時は、一人でやってみるように促しながら支持している。 ・クライエントの問題点を、あなたが指摘するのではなく、本人自身が気づくように促しながら話をきいている。 ・本人のプライバシーに関することでも、生命に関することや明らかに本人に不利益になるとあなたが判断した場合は、本人の許可なく第3者に相談することがある。 ・クライエントの不利益になるとあなたが判断した時、本人の意思を尊重しながら、あなたが気になる点を説明して、一緒に考えるようにしている。 	

るアセスメント過程の精神保健福祉実践活動の項目の妥当性をより高めることが必要であり、今後、エキスパート・レビューやPSWの実践者による項目の検討を行うことが必要といえる。

2) エンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程の精神保健福祉実践活動項目を用いた実践頻度の検証

本稿で提示した精神保健福祉実践活動の41の項目を用いて、PSWの実践頻度の現状を検証することが求められる。提示した項目の中には、さまざまな入手経路を活用した情報収集活動の項目やクライアントの危機状況に関する情報収集活動の項目が含まれている。しかし、さまざまな入手経路を活用した情報収集活動については、近年、PSWの業務が個別支援を中心に行われる傾向にあることが指摘されていることから、精神障害者の生活課題を社会関係や社会状況のなかで捉える機会が少ないことが推測される。また、クライアントの危機状況に関する情報収集活動については、近年、チームアプローチが推奨されているため、危機状況に関する情報を他職種と共有しやすい環境にあることから、この活動の実施頻度が低くなることも推測できる。しかし、それらの活動は、人と状況の全体性やその関連性、クライアントのセルフケア能力などのストレングスの拡大に価値におくPSWにとって重要な活動であると考えられることから、実践現場のPSWが本項目を用いて、現状を把握することは重要なことであるといえる。

3) エンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程のPSW実践活動の質の向上

PSWの国家資格である精神保健福祉士は『精神保健福祉士法』（1997年12月12日制定）において、精神障害者の保健及び福祉に関する「専門的知識及び技術」をもって、「社会復帰に関する相談に応じ、助言、指導、日常生活への適応のために必要な訓練その他の援助を行う」専門職として位置づけら

れている。本稿で検討してきた PSW が行うエンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程の実践活動にも、PSW の価値や専門的知識及び技術が反映されたものでなければならない。そこには、精神障害者の個別性を重視した PSW の状況判断や価値判断、創造性が必要とされることから、PSW の実践活動の質が問われる。つまり、PSW は自らの実践を常に点検し、実践活動の質の向上を図ることが求められるのである。この実践活動の向上に関して、シュルマン（Shulman, L.）は、SW の態度、向上心、自主的努力などが大きな影響を及ぼすと指摘している³³⁾。このように、SW の実践活動に対する態度や自主的努力の重要性が指摘されているが、エンパワメント・アプローチのアセスメント過程における実践活動との関連性に着目した実証的研究は極めて少ないことから、今後、この関連性を明確にしていく必要がある。

以上をふまえて、今後、PSW のエンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程の精神保健福祉実践活動が行われ、精神障害者のエンパワメントに寄与できることが望まれる。

33) Shulman, L. (1991) Interactional Social Work Practice: Toward an Empirical Theory, F.E. Peacock, Itasca, III, 119-159.

Assessment Process of Practice in an Empowerment Approach by Japanese Psychiatric Social Workers in a Mental Health Field

Setsuko SAKAE

The present study describes assessment process of practice in an empowerment approach by PSW in a mental health field by the literature review.

Assessment is crucial in an empowerment practice, and PSW performing an empowerment practice should know the perspectives of the empowerment approach and the principles in assessment process of the approach.

In the assessment, PSW should focus on the strengths of the mentally challenged (clients). Through the process, PSW should focus on positive capacities of an individual and promote them in assessment process. PSW understand the difficulty of carrying out of a life from a viewpoint of person-in-situation and of the interaction of people and environment in assessment process. The activity in assessment process is consisting of three parts, namely, understandings of client's situation, assistance of self determination by clients, the collection of data about the client and its environment.

Finally, PSW should collect information about the strengths of clients in order that the clients can actively participate in their intervention planning for their lives and enable them to actively live in their communities.

Key words: Psychiatric Social Worker, Assessment Process,

Empowerment Approach, Strengths